

# 山路探定の新出作品

山下 廣幸

平成十六年度に黎明館が収集したこれまでに知られていない山路探定の作品及び探定が江戸において鍛冶橋狩野家の後見役を務めていた時代の作品を併せて紹介する。

## ○山路探定について

山路探定（一七二八〜一七九三）は、『都城画人伝』に次のように紹介されている。「名は通尅、初名通虎、喜平太と称す。都城の家臣なり。画を木村探元に学び、後江戸に赴き狩野探林の門に入る。探林没後、その子探牧若年なるにより、探定を以て後見とす。故に探牧の名印あるものにして探定の代作に掛かるものありという。画名を松石子、守行、探溪、探陽といい、後探定と改む。画道の功により本府の土に挙げられ、奥医師格となり大進法橋に叙せらる。晩年筆意肖々柔らかにして温雅なり。就いて学ぶもの多し。男探英及び探溪、父の業を継ぎて奥医師格となる。寛政五年癸丑十月二十三日没す。鹿兒島松原山中に葬る。石塔の前面に大進法橋泰山探定庵主、左脇に寛政五年癸丑十月二十三日、右脇に賜大進法橋山路探定藤原通尅と記す」（手記、大正七年、井上良吉編、鹿兒島県立図書館蔵）。

また、称名墓志には、「松原山洲崎新地にあり、初名通虎、喜平太と称す。日向都城の家臣なり。画を木村探元に学び、後江戸に行き狩野探林の門に入る。画名松石子、守行、探溪、探陽、探定と改む。本府の土

に挙げられ奥医師格となり法橋に叙す。石塔前面に大進法橋泰山探定庵主、左脇に寛政五癸丑十月廿三日、右脇に賜大進法橋山路探定藤原通尅」と記す。

（注）探定の名に「通尅」があると『都城画人傳』『薩藩画人傳備考』『称名墓志』などに記すが、「尅」の文字については読み方を含めて不詳である。

これらをまとめると、探定は都城島津家の家臣であったが、木村探元（一六七九〜一七六七）の晩年の弟子となり絵の修業に励み、やがて鹿兒島藩の士分に取り立てられている。のち、時期は不明であるが江戸に出て鍛冶橋狩野の探林の門に学び、探林没後はその子探牧の後見を務めたと伝える。

薩摩画壇にあっては、探元の初期の弟子である押川元春（生没年不詳）や能勢探龍（一七〇二〜一七五五）などが没した後の弟子として活躍した絵師で、さらに探英、探溪の子息たちが探元の画流を伝えていったということができる。

## ○山路探定筆寿老人山水図三幅対（写真一）

絹本墨画淡彩 本紙一〇四・五×四六・八cm

全体一八三・二×六〇・三cm

三幅対の内、中幅には遠景に山岳が、近景に松が覆う建物、そして

の建物の中に寿老人、福祿寿、南極老人と考えられる三人及び通常寿老人が伴う鹿（玄鹿）が描かれる。また、この人物の顔や頭の部分に薄く朱が入れられている。さらに近景には鶴と亀が描かれており、吉祥画の意味が強いと思われる。左右幅は遠景に山岳、中景ないし近景には松と海、湖または川に浮かぶ舟、そして人物が点景として加えられる山水画である。全体の印象は雪舟の描く山水画に近く、人物の描き方は国宝の「山水図」（個人蔵）に似ており、舟のモデルは「四季山水図巻（山水長巻）」（毛利博物館蔵）に見られるものに類似している。

三幅共に落款はなく、それぞれに大小二顆の印が捺されるが、目の粗い絹本の作品であり、さらに経年変化により印泥が薄くなり読みにくい。中幅の印影がかすかに見える状況で、左右幅のものはほとんど見えない。接写写真で拡大すると、画面の絹面も拡大され、印泥の付着するところしないとところ斑になり、さらに読みにくくなる。そこで、今回の解説に当たっては、写真をパソコンに取り込み印泥の色彩を変化させ、色セロファンを使うなどフィルター効果を利用して解説することを試みた。その結果、「人在今時心遊上古」（遊印）、「山路氏」（氏名印）の印が捺されていることが確認できた。遊印は自分の名前や雅号ではなく、愛好する詩句や成語を印章にしたものであるが、朱文方印で三・四×三・〇cm角あり、氏名印は白文方印で〇・八cm角である。

印影の解説については、鹿児島大学松清教授にご指導いただき、ようやく解説できた次第である。紙面を借りて感謝申し上げます。

格納箱は杉製で、箱書は表に「三幅対 山路探定筆」、裏に「左山水 中雇寿老神 右山水図」とあり、その下方に「三幅対 探定筆」と記される。ただ、表書きの方は裏側の書と書風が異なり、後世書かれた

ものと思われる。

旧蔵者は、箱書や伝来から探定の作品と認識していた。しかし、筆者は絵のできはなかなか立派であるが、格納箱は不用意に入れ替わることもあり、探定の手になる作品であることを確実視できないと考えていた。ただ、相当の絵師の手になる作品であることはまちがいない、外部の専門家の意見も聞きながら検討を重ね収集した。そして、前述したように各種の手段を講じ、「山路氏」の印を解説した結果、箱書のとおり探定の作品であることを確認したわけである。

ここで、箱書にある「雇寿老神」の意味について考えてみたい。「雇」は文字どおり「賃金を支払って使用人をかかえる」という意味にとり、画中に描かれる三人は人の寿命をつかさどる仙人であり、この三人を雇って絵の発注者である人の寿命を長らえる意味を持たせたのではないかと考えられる。このように考えると、三人の手前に描かれる鶴と亀も「鶴は千年、亀は万年」といわれるように、共に長寿を願って描かれたものであろう。

○山路探定筆東方朔鶴図三幅対（黎明館寄託品）（写真二）

三幅対のうち中幅は東方朔と箱書にあるが、東方朔が一般的に手に桃を持つのに対し、この作品では蓑亀を手になっている。東方朔は、西王母の桃を盗食して長寿をほしいままにしたという伝説をもつが、この作品では同じく長寿の象徴である甲に緑藻を背負う蓑亀を持たせている。また、左幅には竹に鶴、右幅には梅に鶴の親子が描かれており、全体として長寿を願い、中幅の松と左右の竹と梅で松竹梅の吉祥画の作品となっている。

絹本墨画淡彩 本紙一〇四・五×四六・八cm

全体二〇五・〇×五五・二cm

箱書 表に「 一幅 東方朔

三幅対一通 一幅 梅 鶴 河南源兵衛根眞

一幅 竹 鶴

裏に「天明二年壬寅 東都在鍛冶橋画之給也」とある。

作品の落款は「探定齋守行画」、印影は白文方印「山路探定」、朱文瓢印「守行」である。

探定は、鍛冶橋狩野家の探林守美（一七三二〜七七）の門に入り、後その子探牧守邦（一七六〇〜一八三二）の後見役を務めたと伝えるが、この箱書から天明二（一七八二）年に、探定は江戸にいたことが確認できる。この作品が河南家に求められた時にはすでに探林は没しているが、探定は江戸に居り探牧の後見役を果たしていたことを示唆している。

鍛冶橋狩野は、徳川幕府御用絵師のうち最も格式の高い奥絵師四家（他に木挽町・中橋・浜町狩野）のひとつで、狩野探幽が元和三（一六一七）年に徳川幕府から鍛冶橋門外に屋敷を拝領したことに始まるが、名目上は狩野孝信を始祖とする。その系譜は、探幽（一六〇二〜七四）―探信守政（一六五三〜一七一八）―探船章信（一六八六〜一七二八）―探常守富（一七〇六〜一七五六）―探林守美（一七三二〜七七）―探牧守邦（一七六〇〜一八三二）―探信守道（一七八五〜一八三五）―探淵守真（一八〇五〜五三）―探原守経（一八二九〜一八六六）と続く。

薩摩の江戸時代中期を代表する絵師木村探元は、探幽の画風に私淑しその子探信守政の門に学ぶが、探元の晩年に教えを受けた探定も、また探幽の流れを汲む探林守美に入門したことになる。薩摩画壇では、木挽

町狩野に入門する絵師が多い中であって、どのような理由で鍛冶橋狩野に入門したか、現段階では不明である。

なお、この作品の伝来した河南家は中国河南省出身の藍会栄を祖とする。会栄は、初め琉球に渡来し、さらに寛永年間に薩摩に来る。藩の要望もあり、帰化して阿久根に居住し、藩の唐通詞となり河南源兵衛と称した。のち藩の唐物取引にあたり、御用商人として活躍した。会栄（初代源兵衛）の後には根実、根斗、根栄、根眞、根綿、根心と続き、この三幅対を求めた所持者の河南源兵衛根眞は、初代河南源兵衛から五代目の源兵衛のことである。五代源兵衛根眞が商用で江戸に出た折りに求めた作品であろう。

探定の作風について鹿児島市立美術館の山西建夫氏は、「探定は、師探元の力強い作風と比べると柔らかな印象を与える」（鹿児島市立美術館グリーンルーフ No.五八、平成十七年三月二十日）と述べているが、先の作品は雪舟の作風に倣っているために特にそのような印象はないが、この作品では山西氏のいう流れるような衣紋線や鶴の輪郭線などにこの特徴がよく表れていると思われる。

（本館学芸専門員）

(写真) 山路探定筆老人山水図三幅対



(箱書)



(印影)

(写真) 山路探定筆東方朔鶴図三幅対



天明二年 京都 探定筆 鶴図三幅対



(箱書)



探定筆 行画

(落款・印影)

